

矢中・矢女・矢高百二十年の歩み点描

旧制矢掛中学校の歩み

明治三十五年から昭和二十四年まで

一、全住民の期待を担った開校（明治三十五年）

創立当初の面影を残している校門を入るとすぐ左側の松林の中に、古色蒼然とした感じの頌徳碑が立っている。

この碑文は本校の教師であった川井健治先生が撰せられ、書かれたものである。この碑文によって本校の開校に至った経緯を察することができる。岡山県における中学校で一番古いのは明治七年（一八七四）設立の中学生養成所（のち明治十九年発布の中学校令に基づく岡山中学校）、次いで日清戦争前後の経済的な繁栄を背景に明治二

十八年（一八九五）津山中学校、高梁中学校が設置された。いずれも城下町である。しかし、人口密度の高い備中南部に中学校がなかったため、第四中学校設置の運動が起こるが、倉敷・玉島・笠岡・井原などの有力候補地を退けて、この矢掛の地に中学校が設置されることになった。

条件的には、矢掛が一番不利であった。当時の矢掛は、宿場町とはいふものの人口四千人が五千人程度の草深い田舎町であり、小田川には物資運送の高瀬舟がまだ上りくだりしていた。問題は交通機関で、人力車ぐらいしかなかった。

すでにJRの前身の山陽鉄道は明治二十四年（一八九一）には笠岡まで開通し

ていた。にもかかわらず、なぜ矢掛の地ということだが、それは当時の矢掛

すでにJRの前身の山陽鉄道は明治二十四年（一八九一）には笠岡まで開通し

ていた。にもかかわらず、なぜ矢掛の地ということだが、それは当時の矢掛



校門



頌徳碑

町の先見の明である。当時の高草常太郎（一八五九—一九〇六）町長が、当時の矢掛町の年間予算とほぼ同額の二万余円を投じて三万平方メートルの敷地を購入され、中学校設立の熱意を示し、私財も投じられたとのことである。そして地元出身の木村清四郎（一八六一—一九三四）日銀営業局長（のち理事、そして副総裁となる）の文部省への働きかけもあり、こうした多数の郷土愛に根ざした物心両面の尽力により、この矢掛の地に、当時の言葉で言えば最高学府である県立中学校が設立されたのである。

これまで単なる通過点でしかなかった宿場町に文化的拠点である矢掛中学校ができたことは、地域社会をあげて誇りとするのであった。本校設置における矢掛町を中心とした地元の方々の果たされた役割は大なるものがあり、忘れてはならないところである。当時の高草町長の業績を記念して、大正十一年（一九二二）頌徳碑が建立され、木村日銀副総裁の功績を記念して木村公園が昭和十一年（一九三六）に造られ、中央に胸像が建てられた。戦後この地は保育園となり、現在はネバーランドとなり、その一角に復元された胸像が立てられている。

二、創立時代（明治三十五年～四十年）

明治三十五年二月、岡山県師範学校泉英七教諭が本校校長に任命された。着任された

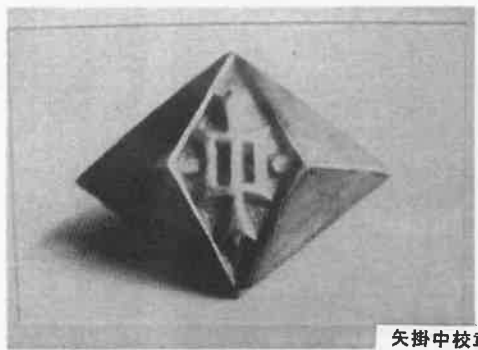
初代の泉英七校長初仕事は現在まで受け継がれている校章の制定であった。校章・校旗・校歌は学校の象徴である。矢掛の矢を入れたデザイン、一直線に飛び行く矢のよう

に、ひたすら学問やスポーツに励んで欲しいという願いが込められている。やがて四月

一日、開校が告示された。英国人技師の設計による二階建て本館が落成、正門に岡山県



木村清四郎胸像



矢掛中学校章

立矢掛中学校の校札が掲げられた。明治三十五年五月五日、国旗が掲げられ、提灯行列が行われ、矢掛町始まって以来という賑わいの中で第一回入学式・開校式が挙行された。丁度百二十年前のことで、国際的には日英同盟が締結された年で、日露戦争の二年前である。

一四七名が入学を許可され（卒業時には六十七名）、当時としては珍しく制服・制帽に革靴といういで立ちであった。当時は着物が一般的であり、靴に至っては、この前年ハダシ禁止令が政府から出されたばかりであった。校舎内は革靴で、下駄履きは禁止であった。寄宿舎もあり、五年制で定員五〇〇名のエリート校であった。

この頃、公私立を含めて中等学校への進学率は約四%で、勉強ができて、かなり裕福な家の子弟しか進学できなかった。大正十一年（一九二二）卒の作家木山捷平氏によると、中学校では難しいことを習うので、頭が「わや」になると言われていたので、高等科一年の回り道をして中学校に入学したとある。

三、基礎確立時代（明治四十一年～明治末）

岡山師範学校から迎えられた、第三代岡野新校長は着任早々、新しい計画のもとに旧弊を改め、校風改革に努力された。日露戦争後の明治四十一年、世の中全体が浮ついているのではないかととして、勤儉節約を内容とした戊申詔書が出された。同年、矢掛中学校では、「至誠力行」の

校訓が制定され、質実剛健の校風が生まれた。現在、校門を入ったところ



校訓碑



創立間もない頃の正門

ろに矢掛高校初代校長、小川博史先生の書かれた校訓碑がある。また、

高妻記念館には千家尊福氏（一八四五—一九一九）の「至誠力行」の扁

額が収められている。千家の家は出雲大社において北島家と並ぶ世襲の

神官の家柄で、彼自身は男爵・貴族院議員・埼玉と静岡の県知事・東京

の府知事・司法大臣を勤められた。この人の息子さんが詩人の千家元麿

氏である。団体長距離競争も実施され、以後、毎年十一月に行われ、学

級ごとの成績を競い、優勝学級には優勝旗が授与された。この年の夏、同窓会も創立されている。

明治四十年以降の学校行事の主なもの、創立以来毎年行われていた修学旅行（五年京阪地方、四年広島地方、

三年高松地方、二年尾道地方、一年県内）、発火演習、運動会および四十一年から始まった団体長距離競争である。

ただし、四十三年秋、特別大演習陪観のため、職員生徒四〇〇名が岡山方面に五日間の修学旅行をしているのが

注目される。

校歌については、明治四十三年に作られているが、作詞家、作曲家共に不明であり、当時の卒業生に聞いても

記憶している人はいなかったようである。これとは別に大正、昭和と終戦に至るまで歌われ、卒業生の脳裏に深

く刻み込まれている「高妻山の峰高く 小田の流れの水清し」の校歌は、大正四年三月英語の教師として赴任さ

れた杉野芳郎先生によって作詞されたものである。この校歌作詞のいきさつは、元本校校長小川博史先生のご尽

力により、杉野先生に直接おたずねした返信をそのまま記載させていただく。「作詞についてですが、制定委員会

が作られて、制定委員に国漢教員全員の他に私一人が部外から選ばれました。伊藤先生を始めとして、片山先生、

高戸先生等でした。相談の末に各委員が一編を作ることになりましたが、互選の結果、私のものが採用されまし



第一回卒業生

た。これに修正が加えられてでき上がったのが今の校歌です。作曲については誰にも依頼はしませんでした。私
が聞き覚えていた曲を頭において作詞したので、曲が先にできて、後に歌が作られたという訳です。曲は大学が
高等学校のもので相当にポピュラーなものだと思いますから、調べれば分かると思います。作詞者は私一人占め
にするのは申し訳ありませんが、作曲の方はあの曲でうたってもらおうと思いつきながら作詞したのですから、作曲
家に分からなかったら作曲家の名誉を頂いても結構です（これは冗談です）。と。この校歌の作られたのは大正
四年、五年頃と思われる、歌曲は陸軍の「歩兵の本領」と同じで、この軍歌を調べてみると、これは明治四十四年
（一九一三）陸軍中央幼年学校百日祭で発表されており、作詞者不明、作曲については、明治三十四年（一九〇
一）第一高等学校の寮歌として発表された「アムール河の流血」の曲を借用したと記録に残っている。杉野先生
は、曲は大学が高等学校のものとはかかれていらっしやるが、この一高寮歌を指すものと推測する。校歌の成立
年代だが、杉野先生は東京高等師範学校を大正四年三月に卒業後、赴任された。杉野先生を加えた委員会の成立
は早くても五年頃ではないか。したがって校歌の成立は五年以後と思われる。校歌は、その学校の象徴であり、
学校の理想が歌い込まれており、その精神は現在の校歌にも継承されている。

四、大正初期（大正元年〜四年）

明治四十五年七月三十日、明治天皇崩御。十月二十日から二十二日まで、

明治天皇を敬慕し、全職員生徒が伏見桃山御陵に参拝している。

現存する明治記念館は大正四年、明治天皇の「聖徳を記念するため、教員、

卒業生、全生徒の寄付によって建てられたものである。当初は校地東南隅に



明治記念館

あったが、昭和四十三年（一九六八）に校内の、図書館と向かい合う今の場所へ移築された。この木造平屋の洋館は建築家江川三郎八氏（えがわさぶろうはち）の設計で、切妻造りの玄関ポーチ上部で、中央を半円型に割った垂れ壁を破風板に取り付けるなど、本記念館独自の意匠が見受けられる。何よりインパクトがあるのは、玄関を含む三面へ半間置きに配した半間幅の上げ下げ式窓である。延べ二十坪弱の小建築に、これほど大きな窓を並べたのはなぜか。それは、本建築においては合理性以上に、「明治記念館」としての記念性が重視されたからだと考えられる。なおこの窓のアプローチは、十六世紀後半のイタリアで見られる様式・マニエリスムを思わせる。それはルネサンスで好まれた定型を逸脱し、時に不自然なまでの誇張表現に至るものであった。江川氏はこれを独学で学び、応用されたのかもしれない。

大正四年八月二十四日、県立津山中学校から青木勘先生が本校校長に任命された。新校長赴任を記念して前庭の小松、記念館前の杉を植えたとのことであるが、記念館前の杉は新体育館建設、武道場移転によって姿を消した。この記念樹に関連して、明治四十年第一回卒業生から数ヶ年にわたって記念植樹がされている。四十年、四十一年の校門前道路をはさんで左右に四季緑を変えない記念の松、四十四年、大正二年卒業生の玄関右側に移転された男性的剛直さをもった大蘇鉄、大正五年卒業生の武道場南白壁に沿って亭々としてそびえる楠の木、その他記念植樹と思われるものが多数あり、今もなお、それらを記念する石碑があちらこちらに残っている。

五、学校長青木勘先生在職時代（大正四年～昭和六年）



卒業記念樹

大正四年八月に前校長林文五郎先生の退職に依り、後任として青木勘校長が岡山県立津山中学校教諭から赴任され、大正十四年七月、佐賀県立佐賀中学校に転出される間、大正時代のほとんどが青木校長であった。

青木校長の在任は足かけ十一年で、その間、国内、国外の情勢も移り変わ

り、矢掛中学校も創立二十年も経過して、人間で云えば青年期から壮年

期への過程を歩んだ時代である。大正十四年四月より、軍事教練の強化

対策として現役将校が配属され、時代は不況のどん底にあつて、中学進学者も授業料、教科書代にも困り、同窓会の発起によつて青英資金募集が試みられる。そして大正天皇「崩御となり、大正時代は終わりを告げるのである。

学校長青木勘、通称「青勘」で十年余、当時の在校生は、この呼称により、極めて親しみのある校長として慕つていた。青木校長はスポーツの校長として令名があり、雑誌「中学生」に校長を評して「夜になったら提灯つけて「雨が降ったら雨傘さして ラケット手にする青木校長」という記事が載ったぐらい職員、生徒共にテニスが盛んであつた。三つのコートが六つになり、校内においても対級戦、寄宿舎の対室戦等盛んに行われた。「火鉢は戸外に」をモットーとされた校長のもと、老若を問わず、全職員がテニスボールを追つた情熱は目を見張るものがあつたと聞く。遥照山登山に伴う金光中学との恒例の剣道対抗戦は、おそらく青木校長赴任後、大正六年頃に開始されたのではないかと思われる。金光中学と本校のちょうど中間七キロの位置にあたる遥照山（現在は東京大学天文台で有名）の山頂広場で、双方の選手たちが学校の名誉をかけて戦つた。この試合の前には、選手を除く生徒全員が、山の中腹から山頂までかけ登るクラス対抗の競争も恒例になっていた。豪快にして、スポーツ



青木勘校長

校長として令名のあった「青勤時代」はこれから十年間続き、こうしたことから矢中の運動部にそれぞれ氣勢があがりはじめた。大正十二年には愛知県から西村静夫先生が赴任され、昭和十二年まで十三年十か月の間、体育の鬼、球技の神として県下は勿論、全国的に活躍された。青木校長も西村先生赴任に当たり、「本校は長く兵隊式だ。思い切ってやってもらいたい。費用は校友会費をあげて之に充てる。」と大きな信頼を寄せ



明治神宮大会出場

た。サッカー、ラグビー、バスケットボール等の新しい球技の導入、特にバスケットボールへの力の入れようは大したもので、試合前一ヶ月になると、西村先生の家都合宿ということは度々であった。後には二度にわたって明治神宮大会の県代表として出場している。特に昭和六年神宮大会に上京した機会に、一同揃って郷土が生んだ憲政の神様、犬養毅先生の自宅を訪問し、茶菓に接し、郷土青年のためにと「『求則得之』為矢掛中学」と「舎則失之』昭和六年冬」の二つの額を約束され、後日いただいた。これらは犬養毅先生が総理大臣となられる直前の書であり、昭和七年五・一五事件で「話せばわかる」「問答無用」と右翼青年将校らの凶弾に倒れた先生の、この頃のものとして極めて稀な書として知られており、現在この書は本校校長室に掲げられている。

当時の学校行事に関しては、大正期の始業式、入学式は例年四月十日前後。創立記念日は五月五日（明治三十五年五月五日に第一回入学式並びに開校式が挙行されたため）。現在の矢掛高校でも原則として五月上旬に記念式典を開催している。ただし今回の百二十周年記念式典は令和三年十二月十七日に挙



犬養毅書

行予定である。

ちなみに当時は校友会があった。校友会とは新しい高等学校の生徒にはピンと来ないかもしれないが、中学校
当時に過ごした人達にとっては実に懐かしいひびきであり、さしずめ現在の生徒会に置き換えることができる。

会長（校長）、副会長（教頭）その下に理事が置かれ、雑誌部、談話部、図書部、剣道部、柔道部、庭球部、音楽
部、遊技部、庶務部、会計部があり、それぞれに理事（今で言うところの顧問）という名目で教職員が置かれて
いた。その下に委員があり、生徒の代表が任命されていた。

六、昭和七年より戦後の混乱期まで（昭和七年～昭和二十四年）

昭和七年五月には創立三十周年記念式典が催され、記念講演会、運動会、各種展覧会を三日間にわたって開催
し、多数の来観者で賑わった。昭和八年、同窓会は母校発展のため、元日銀副総裁木村清四郎氏を推薦して奨学
制度を創設し、県の許可を受けて資金募集を始めた。

昭和十年には台湾からの留学も始まった。台湾は一八九五年の下関条約で日本領となったが、現地の中学校の
数は少なく、進学は困難を極めていた。矢中出身の方が小学校の教員となっ
て台湾に行かれ、勿論入学試験を受けてのことだが、矢中入学への途が開か
れた。今なら飛行機で一飛びだが、船旅で五日かけて矢掛まで入学試験を受
けに来られ、昭和十年から始まって十六年までに四十一名の方が矢中で学ば
れた。創立九十周年記念式典には代表の方がお見えになられ、当時の矢掛中
学校や先生方に対して深甚の謝意を表された。古い言い方にはなるが、学な



台湾からの留学生

らずんばの意気込みで万里の波濤を越えられて来られたことに敬意を表すると共に、受け入れた当時の矢掛中学校の懐の深さに感銘を受ける。

昭和も十年代後半になると、次第に戦時色が濃厚になって来る。昭和十六年には食糧不足のため、米などが配給制となり、開墾や出征兵士・

戦死者の家の農作業を手伝うなどの勤労奉仕が始まった。十九年になる

と、上級学年は軍需品生産のため、岡山・倉敷などの工場に動員され、

二十年春は動員先の工場で卒業式が、しかも中学校令、高等女学校令の改正により、四年制となったので、四年生・五年生あわせて同時に行われた。下級生も開墾や田植え作業に動員され、授業どころではなくなった。この

頃、生徒であった方々は、通算してみれば教室での学習期間が最も短く、教育施設も最悪であった。しかし、実存主義でいう「限界状況」のような時代であったからこそ、真摯に生きるとはどういうことかを深く学ばれたの

ではないかと感じられる当時の資料が数多く本校図書館に所蔵されている。八月十五日に終戦を迎え、学業への復帰となるが、戦後は学制改革が待っていた。昭和二十三年四月、岡山県高等学校設置条例により、岡山県立矢

掛中学校は、岡山県立矢掛第一高等学校と改称し、創立以来、親しまれてきた

矢掛中学校の名称が消えてしまった。

昭和二十四年（一九四九）八月、矢掛第一高校と矢掛第二高校（矢掛高女）

とが統合し、ここに新制岡山県立矢掛高等学校が産声を上げた。校長は全員異

動の対象となったため、赴任してわずか一年で、同年八月には鳥越校長は笠岡

高校に転任され、九月には総社高校小川博史校長が新制矢掛高校初代校長と



勤労奉仕



小川博史校長

して就任された。この年の十月七日から三日間、統合を記念して最初の

矢高祭が開催された。制度上は一つに統合された矢掛高校ではあるが、

実際には旧制矢掛中学校の使用してきた校舎を東校舎と呼び、男子生徒

の授業を行い、旧制矢掛高等女学校の使用してきた校舎を西校舎と呼び、

女子生徒の授業を行い、依然男女別学のままであった。実質的に男女共

学になるのは二十五年の入学生からで、この年の九月には東西両校舎の

同窓会が統合された。東西両校舎が統合されたのは昭和三十六年九月のことである。

以上のように戦後の学生改革を経て、旧制矢掛中学校の校訓「至誠力行」と伝統・精神を継承しつつ、昭和二

十四年に新制矢掛高校として再出発することになった。

矢掛高等女学校の歩み

大正二年から昭和二十年まで

一、矢掛町立女学校の誕生（大正二年）

大正時代に入ると、世の中は大正デモクラシーの影響で自由主義化が進み、また資本主義経済の発展に応じて

中等・実業・高等教育が拡充されはじめた。その波は、矢掛の地に及び、大正二年四月、はじめて「女学校」が

矢掛尋常高等小学校附設矢掛町立女学校として、小学校内に設立された。

二、矢掛町立實科高等女学校時代（大正四年～八年）



新制高校としての再出発



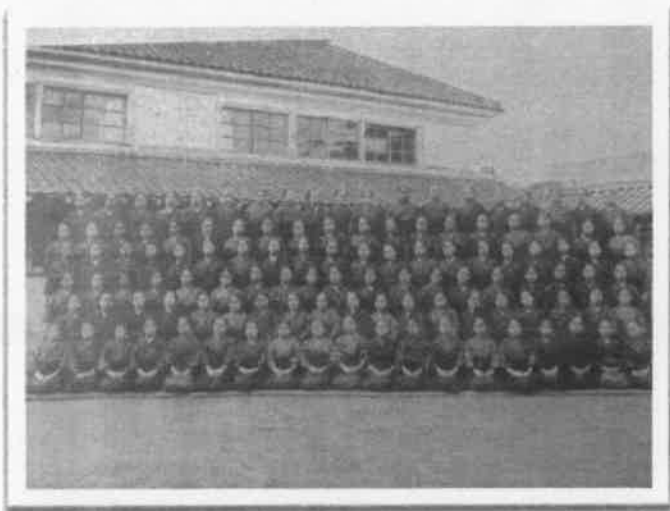
統合記念文化祭

明治三十二年（一八九九）に発布された高等女学校令が明治四十三年に改正され、実科女学校の設置が認められたのに伴い、女学校が小学校から独立して実科高等女学校となった。これにより高等女学校令に基づく学校となり、家政を中心として教える学校であることが許可され、修業年限が四年となった。この実科女学校の開校式の時の知事の告示に「良妻賢母教育」という言葉がある。良妻賢母教育とは、当時の高等女学校教育の基本的な方向であった。女性を家庭に閉じ込めようとするものであるという批判もあり、時代的制約はあるが、「女子教育の許否は国家の安危と関係」（森有礼）するという認識のもと、女子中等教育は整備されてきたものと思われる。矢掛の女学校は卒業生の方にお聞きすると、良妻賢母教育はともかくとして、先生方の率先垂範のご指導の下で、人間性の調和的な発展を目指した全人教育をしていたという、よき思い出を持っておられる方が多いようである。矢中の至誠力行のような校訓はなかったが、きめこまやかな教育が行われた学校であった。

大正五年には校歌が制定され、校友会誌「八千代」が発行された。女学校の校歌については、作詞者・作曲家ともに不明であるが、作曲家については山田耕作氏説が有力である。この点については、女学校の卒業生の方が、これ以上調べようがないぐらい熱心にお調べになっており、詳しいことは七十年記念誌「古希」に譲ることとする。そこにみられる母校愛には本当に頭の下がる思いである。

三、矢掛町矢掛高等女学校時代（大正九年～十二年）

大正九年には、家政中心ではなく、「女子の須要なる高等普通教育



矢掛町立実科高等女学校

をなす」高等女学校となる。四月、文部省の許可を受けて、修業年限四か年、従来の選科を廃し、一か年の補習科を置き、生徒定員本科二五〇名、補習科三〇名で、五月には、校名を「岡山県矢掛高等女学校」と改称して新たな歩みを始めた。

大正十三年二月十日、講堂新築落成式が挙げられた。次第に規模を拡大しながら、女学校として発展・充実を図っていったといえよう。

四、矢掛町外七か町村組合立高等女学校時代（大正十二年～大正十四年）

経済的な理由により、高等女学校は矢掛町立から矢掛町外七か町村組合立に移管することとなり、補習科を廃止した。四月五日、講堂に於いて入学式が挙行された。昭和二年（一九二七）四月には四年制度による卒業生の

中から希望者を募集し、第五学年一学級を編成することも試みられた。大正二年に町立女学校が設立されてから、

幾度か校名が変わり、学校内の形（定員・科の構成・修業年限）も変化がみられる。しかし、教室の新築、増築、作法室・家事実習室の増築、講堂二階建新築と、次第に規模を拡大

しながら、女学校として発展・充実が図られていった。

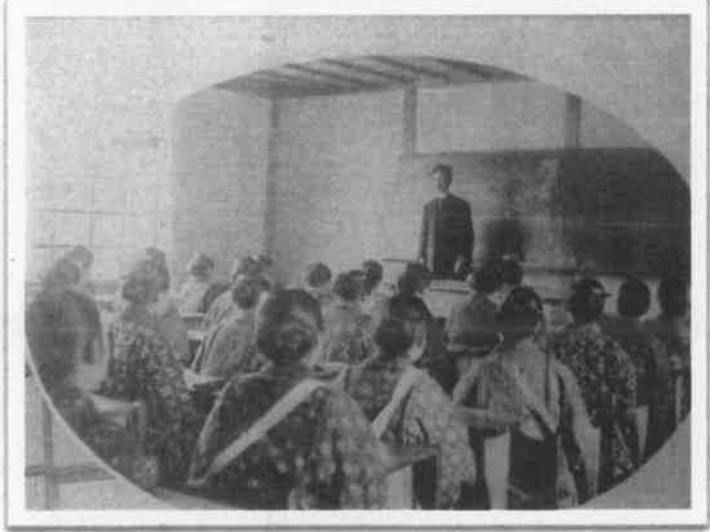
五、岡山県立矢掛高等女学校時代（大正十四年～昭和二

十四年）大正十年（一九二一）順正高等女学校が、翌十一年西大寺

高等女学校が、少し間を置いて、昭和三年倉敷・味野・和氣・林野・

福渡・総社・玉島・笠岡・落合の九高等女学校が、翌四年井原・邑

久の高等女学校が県営に移管された。昭和十四年四月、矢掛・瀬戸・



授業風景

新見・成羽の四高女が県営となり、矢掛高女も校名を「岡山県立矢掛高等女学校」と改称した県営移管は昭和二年以来の長年の夢であり、近隣住民はもちろんのこと、在校生一同も共に喜びを分かち合った。

昭和十五年（一九四〇）になると、社会では「トントントンカラリト トナリグミ」と調子のよいメロディーが流れ始め、部落会・町内会・隣保班の組織化が進められるようになった。大政翼賛会を中心に国論の集中が叫ばれ、学校行事にも色々な影響が見られるようになり、田植え・稲刈り・麦刈りなど勤労奉仕作業も学校行事に組み入れられ、国民服令の公布とともにスカートからもんぺが次第に制服化してくるようになった。また、生徒達にとって最大の行事であり、楽しみでもあった修学旅行もこの年が最後となった。翌十六年、いよいよ太平洋戦争が始まった。そのような中でも、県営移管による懸案事業としての理科教室、新被服室、図書館、体育館などの建設が具体化し、意気が大いにあがった。また、運動部（特に卓球部）の活躍もめざましいものがあった。

昭和十九年、戦雲はいよいよ急を告げ、全校あげての非常事態に突入する。労働力はますます不足し、緊急国民勤労動員方策要綱が決定され、本校第一陣（四年生）は、児島郡の日本航空ならびに八紘被服株式会社へそれぞれ出勤することになった。三年生も倉敷市酒津の倉敷レイヨン工場に出勤した。彼女達は昭和二十年、二十一年に卒業となるが、教室での学習時間が最も短く、教育施設も環境も最悪の時代であったと想像される。

昭和二十年三月、本土空襲が本格化する。三月の閣議で、国民学校初等科を除いて全学校の授業は一年間停止が決定された。四月には農業科が新設された。初めて岡山へ出勤した三年生は、その後本当の災難に遭遇することとなった。六月二十九日、岡山市の被爆に



生徒動員

よって職場を焼け出され、急遽引き上げ、新築間もない体育館を学校工場として木製飛行機翼の制作にとりかか
ることになった。昭和二十年（一九四五）八月十五日、終戦。日本政府はポツダム宣言を受諾し、無条件降伏を
した。翌日、各地に出動していた生徒達は全員無事帰校した。約一週間自宅休養の後、八月二十七日から登校、
三十一日に一学期終業式、九月三日には二学期始業式が行われた。国をあげての敗戦のショックに加えて、食糧
難、秩序の乱れ、生活の苦しみは戦争中よりも厳しいものがあつた。

昭和二十二年、教育基本法、学校教育法が公布され、日本国憲法も施行されて新日本の進むべき方向、性格、
教育の在り方が明確にされた。「六三三四制」が実施され、新二・三年生は新制中学の二・三年生ということにな
り、名称も矢掛高等女学校併設中学校となり、新学期への準備が進められていった。この年の三月二十日、矢掛
高等女学校第三十三回卒業式が挙行され、九十九名が卒業し、同時に併設中学校第一回卒業生五十名が巣立って
いった。

昭和二十三年には学校教育民主化の旗じるしのもと、教育委員会が設置され、新しい教育改革の中、四月一日、
岡山県立矢掛第二高等学校が誕生し、同時に矢掛高等女学校の名称は消滅する。同日、矢掛町外五か村組合の委
託による定時制矢掛高等学校（家政科・農業科）が併設された。この時、既に矢掛第一高等学校と改称していた
旧矢掛中学校との合併統合が計画されていた。両校はそれぞれ独自の歴史を持った学校であり、決断までにはか
なりの時間を要したようである。

昭和二十四年八月三十一日、かねて計画されていたとおり、矢掛第一高等学校と第二高等学校、実質的には中
学校と女学校とが合併統合され、名実ともに新制高校、現在の岡山県立矢掛高等学校が発足した。一高（旧矢中）
を東校舎、二高（旧矢女）を西校舎と呼び、校長は小川博史校長一人になった。残暑厳しい旧矢中の校庭で、男

子生徒と女子生徒とが対面式を行った。男女同室の共学は昭和二十五年度から、校舎統合は昭和三十六年九月一日からであった。

県立矢掛高校の発足

昭和二十四年から昭和四十六年まで

一、新制高校の発足（昭和二十四年）

昭和二十四年八月三十一日、矢掛第一高校と矢掛第二高校とが統合され、岡山県立矢掛高等学校（普通課程定員一学年二〇〇名、家庭課程定員一学年六〇名）に編成され、戦後の高等学校教育の第一歩を踏み出すこととなった。校長教職員の再配置も実施され、小川博史校長が着任された。旧矢掛第一高校は東校舎、旧矢掛第二高校は西校舎と呼ばれ、その年度、男子は東校舎、女子は西校舎に分かれて勉強していた。この年、統合を記念して最初の矢高祭が生徒会主催で三日間行われた。

男女共学は男女の教育の機会均等を図るといふ理念のもと、

昭和二十五年（一九五〇）より全面的に実施され、昭和二十五年

四月、県内の県立高校は一斉に男女共学に入った。

二、学校の活性化



校舎統合

新制高校としてスタートして二年後の昭和二十六年（一九五二）、十月七日から九日の三日間にあたり、旧矢掛
中学校創立五〇周年・旧矢掛高等女学校創立三十八周年の記念式典が盛大に挙行された。生徒会活動の中心行事
である矢高祭では文芸会と称された演劇会・各種展示会・球技会・体育大会・バザー・茶会などが盛大に催され
ていた。体育大会の応援は近隣にない規模のものと同負するほど、熱のこもったものであった。準備・球技会の

予選なども含んで、約一カ月にわたる矢高祭はファイヤーストー
ムの火の前に肩を組みつつその終わりを告げるのである。このフ

アイヤーストームは昭和三十年からは禁止され、毎年復活を望む
声が上がっていたが、認められなかった。矢高祭も、翌年に控えた

校舎統合と創立記念式典の準備のための行事の縮小、理科教育研
究校に指定されたこと、進路指導の面などから、三十五年に文芸会
を廃止し、体育祭を中心とする形になった。文芸会の代わりに、各

部が分散的に発表を行うものとし、矢高祭の縮小が惜しまれた。

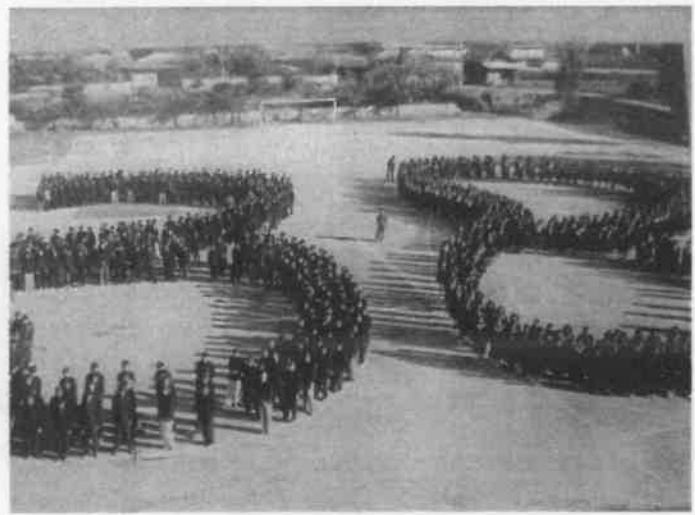
スポーツで華々しい活躍が見られたのは女子卓球部・女子庭球
部である。この時期には国体の常連校であった。矢中時代には「駅

伝矢掛」の名を轟かせた陸上部も昭和二十五年（一九五〇）の全

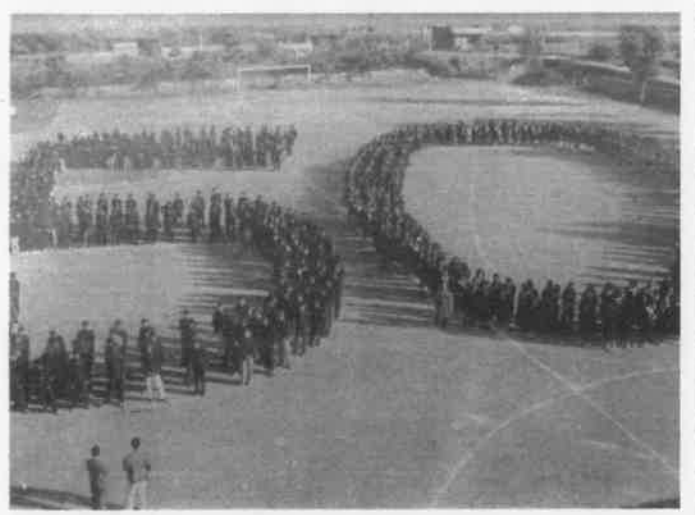
国高校駅伝第一回大会で六位に入賞している。昭和三十年の矢高

新聞によると、その年は庭球部が全日本選手権・西日本選手権、

卓球部が西日本選手権・中国大会、送球部が西日本選手権、籠球



矢掛高等女学校創立三十八周年



矢掛中学校創立五十周年

部が中四国大会と県外遠征が重なり、遠征費の工面に苦慮していたようである。

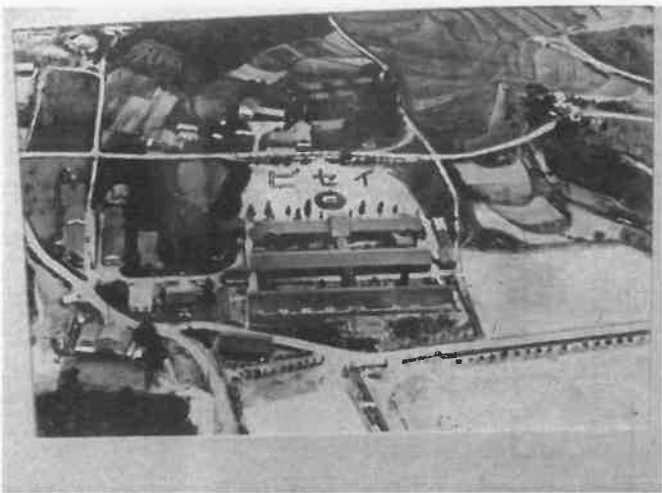
文化部では新聞部が活躍している。三十一年十月に山陽新聞社主催の近県高等学校新聞展が行われ、五十余校の中から五校が選ばれる佳作に入選した。三十五年の毎日新聞社主催の全日本学校新聞コンクールでは「全国佳作」を受賞している。茶道部の活動も盛んで、二十九年の矢高祭で野点の様子が山陽新聞にも紹介されている。

三、独自性を求めて

教育の機会均等を実現するために発足し、大きな期待が寄せられた定時制課程であるが、岡山県では昭和二十七年（一九五二）から三十五年にかけて、併設定時制の廃止、分校の分立が相次いだ。定時制課程に対する認識不足、経済の発展に伴う地域の人口構成や教育観の変化が主な原因である。矢掛高校でも二十七年十月に美星分校が独立し、翌二十八年四月には併設定時制は組合立の高等学校となった。さらに二十九年には全日制の家庭科の募集を停止し、普通科単独の高校となった。昭和二十九年（一九五四）には図書館が東校舎に新築された。

新築された図書館は県下高校図書館のさきがけをなしたもので、各学校から注目を集め、見学者が跡をたなごった。昭和三十四年、矢掛高校の図書館は岡山県図書館協議会十周年の記念時に学校図書館表彰校として選ばれている。閲覧室の隣に作られた視聴覚教室ではレコードコンサートが開かれ、学生たちに憩いのひとときを与えていた。曲目はクラシック音楽やジャズ、外国の民謡音楽などで、出席者からは週に一度は開いて欲しいなどという希望も寄せられていた。

新図書館落成式は昭和二十九年（一九五四）五月二十三日に落成されたが、同日、新しい校歌が披露されている。矢掛高等学校は戦



美星分校

後の学制改革により、矢掛中学校と矢掛女学校とが統合されて誕生したため、当然それぞれの校歌を持っていた。しかし一つの高校となり、同窓会も統合された（昭和二十五年）以上、校歌も共通に歌われ、心のよりどころなるものが、職員、生徒、同窓生からも等しく要望されていた。校歌制定委員会が設置され、新矢掛高校にふさわしい校歌の制定が実現されていった。まず、作詞については当時の小川博史校長が当たられ、昭和二十八年末には完成していた。作曲家については紆余曲折の末、作家芥川龍之介氏の三男で、当時新進の作曲家として活躍中の芥川也寸志氏に依頼された。生徒はこの校歌を胸をおどらせて歌った。

四、校舎統合

同窓会の統合・新校歌制定の次は校舎の統合であった。昭和三十一年（一九五六）に小川校長が退官され、後任として笠岡高校から鳥越隼雄校長が着任された。昭和三十四年に東西両校舎統合期成会が発足し、三十六年の新校舎統合に向けて前進していった。三十五年一月八日、初の校内統合委員会が開かれ、その席において創立六十周年記念式と統合校舎落成式とを三十六年十月に開催すること、同窓会・PTAは校舎統合募金を募り、整備費を補助することを決定するなど、校舎統合計画は着々と進展を見せていた。さらに矢掛町、真備町、美星町、笠岡市の関係市町から補助を取り付けることとなった。このような流れの中、昭和三十六年三月両校舎から移動してくる生徒を収容するための普通教室八教室が東校舎に完成した。ただし、諸種の附属建物未整備のため、四月からすぐに移転することはできず、西校舎生徒は第一学期の間、引き続き西校舎で授業を受けていた。九月に入ってようやく東校舎への移動が完了し、これにより矢掛



新図書館

高校は名実ともに統合を果たしたのである。九月一日、初めて矢高生全員が一場に集まったので、二学期始業式が行われた。昭和二十三年旧矢掛中学校と矢掛高等女学校とが合併されて矢掛高校となつて以来の念願がようやく達成されたのである。

生徒が引き揚げた西校舎は、昭和三十六年（一九六一）十月二十六日正式に岡山県から矢掛町に有償で払い下げられ、町立定時制商業高校として新しく発足することとなった。

昭和三十六年（一九六一）は時あたかも創立六十周年に当たっており、十月六日記念式典が統合記念式典を兼ねて盛大に挙行された。またこの日より三日間を費やして記念祭が開催されている。これに先立ち、校章が統一され、待望久しかった新校旗が作成されて、創立六十周年記念式典の式壇を飾っている。その経緯を植田重校長は次のように回想しておられる。「当時、男子生徒は、図案化された^{やじり}鍔を左右対称にあしらった校章を、女子生徒は桜を主題にした七宝焼きのそれをつけていた。前者には一直線に理想を追求するものの清純な意志が光り、後者のやわらかい色彩の中には、温雅貞淑が象徴されているように思った。それぞれに歴史的使命を果たしてきた名誉に輝いているのであるが、男女共学の一つの学校になっている以上、二つの校章が併用されることはスクールカラーの分裂をさらすことになる。そこで同窓会の男女役員の方々に度々論じていただいた結果、現行のものに統一されることになった。現行のものは旧矢掛中学校の校章であり、初代校長泉英七先生の言によれば、矢掛の『矢』と『直往邁進』の心を象徴したものの由で、そこに理想の男性像が志向されているが、その校章に一元化した以上、そこに新しい次元から理想の女性像の啓示をも見なけ



新校章

ればならない。私はかねてから、剛健を本領としつつも心奥に温雅を湛えている男性を、温雅を本領としつつも、時に臨んでは凜として節を守る女性を理想と考えていたので、現行の校章は男女それぞれの向かうべき標識として当を得ているものと思ったのであった。『古希』」と。

五、高校生気質の変化

高校教育の大衆化、受験教育への傾斜の中で、高校生の無気力、無関心、無感動といった三無主義が指摘されるようになったのは一九六〇年代半ば以降のことである。一九六〇年代終わりから七〇年代初頭にかけて、ベトナム反戦運動や、学生運動は全国的な広がりを見せ、昭和四十三年（一九六八）には国公私立を合わせて一一六校以上の大学が紛争に巻き込まれた。こうした動きは高校にも波及し、全国の数多くの高校で混乱が見られるようになった。この時期、本校生徒を対象にして「高校生と政治活動」に関するアンケートが行われた。その結果

に対して、次のような分析が加えられている。「まず言え

ることは、あまりにも保守的な色が濃いことである。よく

言えば、穏やかなのだが、悪く言えば、いや正直に言えば

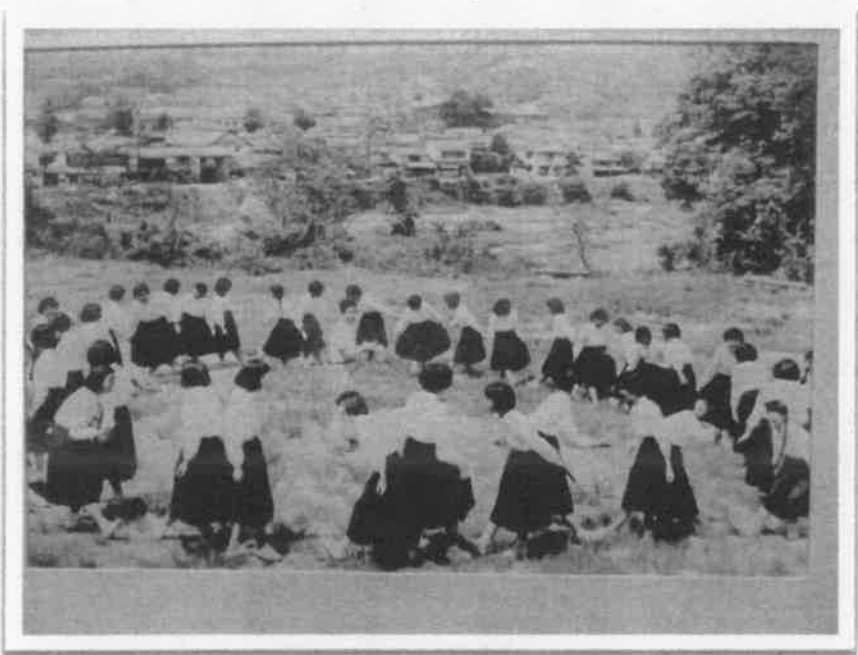
社会や政治への関心がうすく、問題のとらえ方にも不十分

な面もありはしないか。〔矢高新聞〕第八十五号 昭和四

十四年七月十九日〕総じて矢掛高校生は、穏やかに時

代の風に身を処していたようである。

昭和四十六年（一九七一）四月一日、岡山県立美星高等



嵐山でのフォークダンス風景

学校を統合し、普通科五十名の美星分校が置かれることとなった。この時期の上級学校への進学率は年々増加する傾向にあり、四十一年三月卒業の生徒の進学率が五十一%であったのに対し、四十六年三月の卒業生では七十%となっている。この年の十月五日、荒木栄悦副知事、小野啓三教育長や地元関係者をはじめ、渡辺武次郎同窓会長ら同窓生役二百五十名の来賓のもと、創立七十周年記念及び校舎落成記念式典が盛大に挙行された。この式典を経て、矢掛高校は次なる飛躍の時期を迎えるのである。

飛躍期

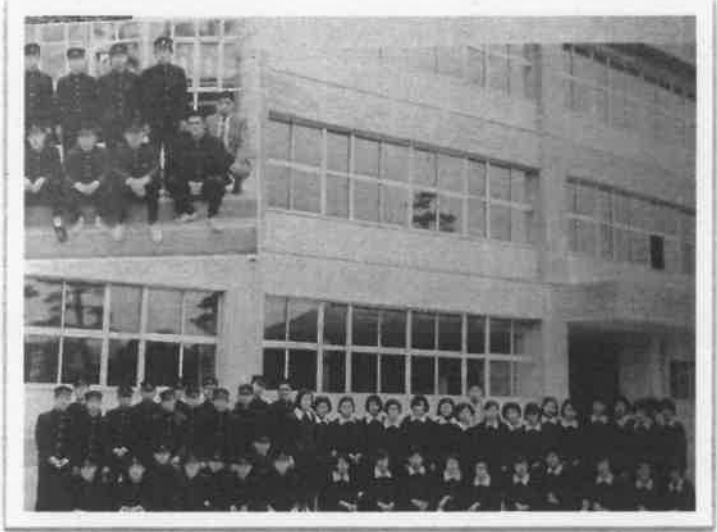
昭和四十七年から昭和六十三年まで

一、普通科高校としての期待に応えて

昭和四十七年から六十三年（一九七二～一九八八）までの十七年間は、普通科進学校としての実績を上げることが矢掛高校の最大の使命であった時期である。この間、ほぼ変わらぬ進学状況が保たれており、一定の成果を上げ、保護者や地域の期待に応えることができたと言えるのではないか。

昭和四十七年は日中国交が正常化し、沖縄が日本に復帰した年で

ある。新幹線が岡山まで開通したのもこの年で、翌四十八年には第一次オイルショックが日本を襲い、高度経済成長は終わりを告げた。こうした中、昭和五十年に完成した高妻会館は、総工費四千三百万円をかけ、五十年二



新築校舎

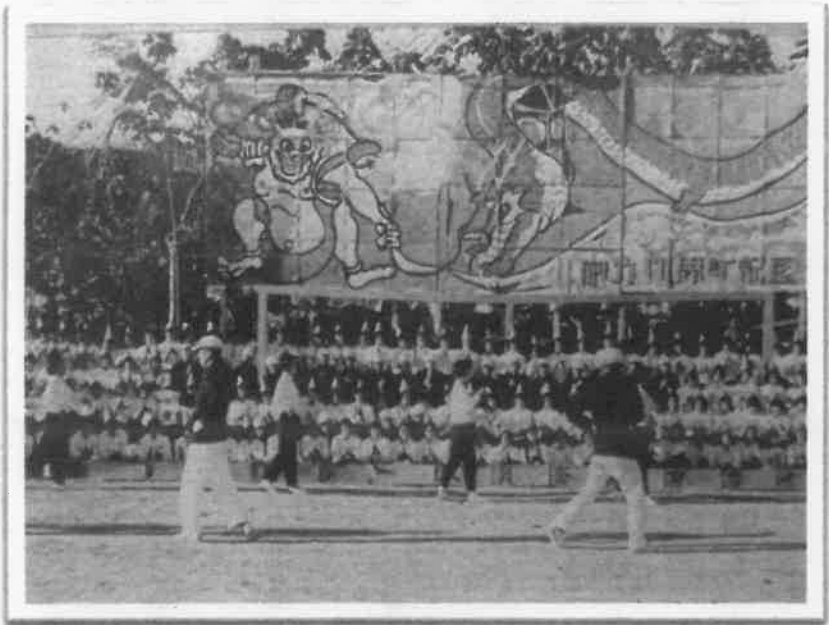
月三日に落成式が挙行された。翌二月四日から、一階の食堂と購買が営業を開始し、当時の食堂のメニューはカレーライス(百五十円)、うどん、ラーメン(各百円)で、教職員や生徒の利用で活況を呈した。二階の大小会議室と和室は、同窓会・PTAの会合や部活動などに利用された。浴室も完備され、運動部の合宿も行われていた。

全国に学園紛争の嵐が吹き荒れた時代からうって変わって、しらけムードが漂い始めたこの当時、『矢高新聞』には生徒会活動の沈滞を取り上げた記事が多く登場している。昭和四十七年(一九七二)には生徒総会で一つも発言が出なかったことが問題視され、その年の『矢高新聞』では二号連続で生徒会の在り方についての特集記事が組まれている。三無主義という言葉がたびたび紙面に登場するのもこの頃で、次のような記事が書かれている。

「高校生の意義『大学ぐらいいは出たい。そこでとりあえず近くにあって、みんなが行く矢高へでも行こう』で、矢高へ来て『あーあ、何と面白くない学校だろう。もっと厳しく(或いは分かり易い授業を)してくれればいいのに。』と思いつつも、ただ漫然と日々を送っている。そんな様子だ。これではいけない。では何故、こういうふうに無気力な風潮が生まれてくるのだろう。それはいうまでもなく、現代の大学制度であり、学歴偏重の社会である。

『矢高新聞』第一〇二号 昭和五十年七月十九日) ちなみ
に昭和五十一年の文化祭テーマは「目を覚ませ!眠れる矢高」という皮肉と期待を込めたものであった。真面目で穏やかで素直だが欲がないと評されることの多かった矢高生。

教師にとってはそんな生徒がもどかしく感じられることもあったであろう。



応援合戦

この時期、部活動は全般的に不活発であると考えられており、『矢高新聞』には次のような記事が掲載されている。「何のためのクラブか。部員不足。これはいったい何を意味しているのであろうか。それはある特定のクラブだけに生徒が集中しているために、それ以外のクラブが部員不足に悩んでいるのではないかということだ。例えば華道部は八十余人の大所帯であるが、部室がない。さて、このように生徒の集中しているクラブにはどんな類似点があるのだろうか。まず、個人的に技術の向上が望まれるようなものであるということ、そして、気楽に楽しくやっていたりけるものであることだろう。半強制的補習という受験体制を敷き、下校時間を厳守させているなどの制限によって、活動時間も少なくなり、内容も充実したものにするには困難だろう。だが、やはり、おもな原因は生徒の側にあるようだ。いわゆる三無や四無主義というものにおんぶされて、どうせやるならば、楽しくやれて負担のかからないものをやろう、何も先輩にしこかれ、苦しみ、疲れて帰って、他のことができないなんてばかばかしいなどと思うのである。〔『矢高新聞』第九十五号 昭和四十七年十二月二十三日〕と。

しかし、全国レベルの活躍をする部もあった。文化部では囲碁部昭和五十二年（一九七七）、五十五年、五十六年に全国高校囲碁選手権大会の団体の部あるいは個人の部に出場し、五十六年には個人の部で、江尻敏彰選手が五位に入賞している。体育部では陸上競技部が槍投げの守屋洋一選手、大友久典選手をはじめ、投てき競技で国体やインターハイに選手を送り出している。五十一年にバドミントンとともに同好会として発足した軟式野球は翌年部に昇格し、四年後の五十六年には県大会で優勝している。

昭和五十一年（一九七六）三月三十一日には、矢掛町立矢掛商業高等学校が県立移管し、岡山県立矢掛高等学校校西分校となった。これより先、四十六年四月一日に、岡山県立美星高等学校が統合され、岡山県立矢掛高等学校美星分校となっていたのに続くもので、矢掛高校は二つの分校を持つこととなった。昭和五十三年、矢掛高校

は創立七十七周年の喜寿を迎えた。この年の定員は三学年とも二百三十名で、新制高校となつてはじめて生徒数が七百名を割った。

二、創立八十周年から新しい時代へ

昭和五十六年（一九八一）、矢掛高校は創立八十周年を迎えた。九月十七日の記念式典に先立って九月十二日には「至誠力行」の校訓碑の除幕式が行われた。『同窓会報』に完成までの経緯が書かれている。「記念碑建設の推進委員長となつた友光教諭（昭和十九年卒）は近傍近在の石探しからはじめ、本年六月、遂に矢掛嵐山の頂上近くにその素材を決定した。文字の揮毫は小川博史はくし元校長に決定し、依頼。それ以来、小川先生は現物の石を見るために何回も足を運ばれ、文字の大きさ、碑にふさわしい書体の研究と書写の積み重ねが実つて遂に現在刻まれている文字が出来上がった。（『同窓会報』第八号 昭和五十六年十一月八日）」と。また、記念碑とともに学校のシンボリック的存在となつている時計塔は記念碑建立より二年前の昭和五十四年に建立されている。これは卒業記念として寄贈されたものである。創立八十周年記念式典は、県関係者、地元関係者をはじめ渡辺武次郎同窓会長（当時）、卒業生三百余名列席のもと、矢掛高校体育館において盛大かつ厳粛に行われた。

昭和六十年（一九八五）発行の『同窓会報』第十二号には、東京銀座のソニービルで開催された「矢掛のほたる展」が大きく取り上げられている。

この年の三月三十一日、西分校が廃止され、四月一日、岡山県立矢掛商業高等学校（全日制課程商業科 第一学年定員百八十五名）として分離独立した。さらに六十一年三月三十一日には五十九年

より募集停止となつていた美星分校が閉校となり、矢掛高校は新たな



時計塔

時代を迎えた。

昭和三年に建てられ、六十年近くも風雪に耐えていた武道場が撤去され、新しい格技場の建設が始まったのは昭和六十一年のことである。翌六十一年三月十四日には四千三百二十万円をかけた格技場が完成し、柔道の授業、柔道部・剣道部の活動に利用され、学年集会にも利用されている。また、昭和六十二年には同窓会をはじめ、多数の助力により、新しい校門が完成し、十一月九日には除幕式が挙行された。門扉も従来の木材から鉄製になった。ちなみに古い校門は現在、高妻会館とひょうたん池との間に移築、保存されている。

昭和六十年代には、学校を取り巻く周囲の状況も少しずつ様変わりし、矢掛高校も他校が抱えていた問題と全く無縁というわけではなかった。交通指導、中でもオートバイ免許取得について大きな方向転換がなされたのもこの時代である。体育祭のメインイベントの一つであった応援合戦は昭和六十三年より廃止された。同年、営業開始から十三年の高妻会館の食堂が閉鎖されることになった。生徒数の減少もあって、次第に経営困難に陥ったのである。

昭和四十七年から五十年にかけて発行された『矢高新聞』の見出しを拾ってみると、「どう見る生徒会の沈滞」、「自主活動はどこへ？補習廃止と授業」、「低調化する部活動」、「何のための集会」など硬派の記事が多い。一般の生徒からの投書も多く掲載されており、厳しい学校批判、教師批判がなされている。しかし、昭和六十年代に入ると、矢高祭に向けての呼びかけの記事、新任の先生の紹介、部活動や行事の結果、卒業生に送る校長の言葉など、形式的なものになり、社会問題を取り上げた記事は影を潜めた。残念ながらこの十年



新格技場

間で『矢高新聞』も次第に精彩を失っていったと言わざるを得ないが、部員不足を克服しながら新聞を発行し続けたという点は高く評価される。

昭和六十二年には国鉄が分割・民営化されてJRが発足した。翌六十三年には山陽自動車道早島～福山東間の開通、新岡山空港の開港、瀬戸大橋の開通など大型プロジェクトの完成が続き、高速交通新時代が到来した。こうした社会の大きな変化同様に、矢掛高校も少しずつ変遷を重ねながら、新しい平成の時代を迎えるのである。

二十一世紀への飛躍

平成元年から平成三十一年まで

一、新たな局面を迎えて

小田郡内の人口減や全国的な少子化傾向の影響を受けて、矢掛高校の生徒定員は平成時代に大幅な減少を余儀なくされた。本校のある矢掛町の人口は減少傾向を続け、昭和四十年（一九六五）には二万人台、五十年には一万八千人台、平成二年には一万七千人台、そして十一年には一万六千人台となった。学区にかかわる美星町の人口減少はさらに急激で、過疎化が進行している。同じく学区にかかわる真備町は、矢掛町・美星町とは異なる人口動態であった。昭和四十年には一万三千人台であった人口が、その後増加し、ピークは平成八年の二万三千五百三十七人となった。ただし、少し細かく見ると、平成に入ってから総人口はすでに停滞局面にあり、さらに平成九年からはそれまで見られなかった減少傾向を示しはじめた。このような要因も含めて、平成十一年度には全県的な学区改編が行われ、矢掛高校は従来の小学区制から中学区制（西備学区）へ移行することとなった。

この時代、沿線地域住民の長年にわたる悲願であった第三セクターの井原鉄道が、平成十一年（一九九九）一月十一日を期してついに開業した。何より中学区制への学区改編（平成十一年度）と重なったことが、生徒の動きに影響を与えたと思われる。矢掛中学校出身者の割合を見ると、平成時代において九年度までは五十%台を維持していたのに対し、十年度以降は半数を割り込み、井原線開業後、その割合は年々低下する傾向を示した。こうした傾向は、単一の理由では説明がしにくいが、井原線の開業と学区改編の時期がちょうど重なったことによる相乗効果とも考えられる。

二、平成時代の新たな試み

いよいよ平成十四年から学校五日制が全国的に実施された。少子高齢化が続く中で平成八年度に第一回のオープンスクールが行われた。この年はまた四十人の定員減（一年生が四クラス百六十人となる）の年でもあった。どうすれば中学生に来てもらえるのか、どのように高校の魅力をアピールするかは、すべての高校が新たに、そして独自の創意をもって取り組むべき課題となった。過疎地を抱える矢掛高校にとっても切実な問題であった。

平成元年度（一九八九）から校誌『高妻』が発刊された。刊行の経緯を当時の三木校長は次のように説明しておられる。「校誌『高妻』は従来、生徒会が発行してきた『生徒会誌』を受け継いだものです。『生徒会誌』は昭和五十五年、生徒会の発意により、生徒会活動・部活動・ホームルーム記録等を中心とした手作りの会誌で、昨年で九号を数えております。その基盤の上に本校生徒・関係者の文芸作品・論説や行事等の諸記録を加え、より



井原線開業

充実した校誌『高妻』として発行することになりました。『高妻』創刊号 平成元年度版」と。

平成時代の部活動で特筆すべきは軟式野球部である。快進撃は平成八年度

(一九九六)から始まる。四月二十八日に行われた春季県高校軟式野球大会

において決勝で関西高校を三対〇で下し、実に十五年ぶり二度目の優勝を果

たした。中国大会では一回戦で山口県の大津高校に六対八で惜敗したものの、

その後の快進撃の幕開けの年となった。続く平成九年度も県大会で二年連続通算三回目の優勝を果たし、中国大

会へと駒を進めた。決勝で鳥取県の米子東高校に、四対二で勝ち、初めて中国大会での栄冠を手にした。平成十

二年度にも春季県大会で勝ち進み、決勝では高松農業高校を四対三で下し、三年ぶり四回目の優勝を飾った。こ

の年は秋季県高校軟式野球大会での、決勝で関西高校を七対四で下し、十年ぶりの優勝と春秋連続優勝という偉

業を達成した。新体操の杉原千亜季選手も全国レベルで活躍し、成果を残した。平成五年には県総体で三位に入

賞、中国大会に出場し、同年の県新人戦では優勝した。続く六年には、県総体で優勝、インターハイに出場した。

他の部活動では、平成十一年度、陸上競技部の後藤良徳選手は、八〇〇m走を中心に優れた成績を収めた。

文化部では、将棋の服部剛史選手の活躍が特筆される。平成五年の春季県大会で五連勝して優勝し、団体戦で

も三位に入賞した。服部選手は同年の秋季県大会でも優勝し、六年一月に埼玉県で開催された第二回全国高等学

校文化連盟主催の全国将棋大会に岡山県代表として出場し、第五位に入賞している。服部選手は同年の県大会で

個人優勝を果たし、徳島での第三十回全国高等学校将棋選手権大会に出場、また県高校将棋竜王として福岡での

全国竜王戦にも参加し、貴重な勝ち星も挙げている。



校誌『高妻』創刊号

三、地域との連携を通じて

平成十六年度（二〇〇四）に岡山県立矢掛高等学校と岡山県立矢掛商業

高等学校とが統合・再編成され、新しい矢掛高校としてスタートを切った

（普通科のみ定員二百名・五クラス）。平成二十年度（二〇〇八）にはユネ

スコスクールに岡山県内の高校としては初めて加盟。矢掛高校は「環境・

地域・国際」を重点的教育分野として位置づけ、そこから派生する様々な

特色ある教育活動を展開し、その成果は全国的にも高く評価されるようになる。ユネスコスクールの一員として

「持続可能な開発のための教育」（ESD）を推進し、岡山県高校スクール十校との交流会や海外研修への参加を

通じて、生徒たちは、持続可能な力を身につけようとしている。平成二十一年度（二〇〇九）には普通科探究コ

ース、普通科総合コース、地域ビジネス科の三つのコースを編成し、それぞれに独自のコンセプトを持たせ、生

徒一人ひとりの進路志望や得意分野に応じた学びの実現を目指す取組を始めた。この三コース制は生徒たちが、

それぞれのコースにおいて、自分に最も適した進路実現を目指すことにつながっている。平成二十二年度（二〇

一〇）には、学校設定教科『やかげ学』が開始された。これは地域を最良の

学びのフィールドと考え、地域の教育力をお借りして生徒の人間力を向上

させることを目的とするものである。地域には多くの魅力があり、多くの

課題もある。矢掛高校では矢掛町と連携して、授業やボランティア、イベン

ト参加、自主活動などで地域の現場に実際に足を運び、多様な人生背景を

持つ地域の人たちと関わり合い、それらの経験を自分の本当の力に変えて



エコ広場



フォレスト内部

いこうとする。「地域からの学び」をしっかりとサポートしてくださる方々も充実している。矢掛高校は、単なる普通科進学校としてではなく、地域に支えられ、地域を支える学校に進化を続けていると言えるよう。

平成二十三年（二〇一一）には「第一回ユネスコスクールESD大賞・高校生の部」を受賞、平成二十六年（二〇一四）からESD世界会議高校生フォーラムに参加し、この頃から「学生コンテスト」での受賞も増えてきた。

また、平成二十六年（二〇一四）にはYKG60（地域活動団体・小中高子ども連合）が発足し、年代の違いを越えた子どもたちのつながりが形成され、矢掛高校生も中心的役割を果たしている。

平成二十九年、矢掛高校は「キャリア教育優良校 文部科学大臣表彰」を受賞し、YKG60も「ふるさとづくり大賞 総務大臣賞」を受賞した。この地域と連携した矢掛高校の取組が高く評価され、当時の皇太子殿下（現天皇陛下）の学校御訪問も計画されるという栄誉を賜った本校であるが、この皇太子殿下の矢掛高校御訪問は平成三十年（二〇一八）七月に岡山県を含む西日本に大被害を与えた豪雨災害により、取りやめとなり、致し方ない状況とはいえ、関係者一同、大いに落胆したものである。

皇太子殿下学校御訪問の中止は、関係者一同を大いに落胆させたが、同時に多くの感謝の念も生まれることになった。豪雨災害により、矢掛高校に通う、多くの在校生が被災した。家屋を失ったり、大切な人を失ったり、その苦しみははかりしれないものであった。特に被害の大きかった真備地区の生徒、ご家族は大変な思いをされていた。その状況を少しでも支えられたらと、地域、同窓会、

NPO法人等、多くの方々から多額の寄付、支援があり、改めて人々とのつながりのありがたさ、頼もしさを実感できたことは、この後も本



やかけ学発表会

校の大きな財産となると確信している。

平成三十年（二〇一八）秋、岡山県教育委員会より、「県立高校に於いて、令和五年（二〇二三）からの入学者が百名を二年連続で下回ると、再編計画の対象とする。あるいは、同じく八十名を二年連続で下回ると募集停止の対象とする。」という岡山県高等学校教育体制整備実施計画が発表された。同時に本校を含め、県内で百二十名定員の高校が『リージョナルモデル研究校』に指定された。このリージョナルモデルは、基本的には「地域連携を通じての更なる学校の魅力化」を目指すものであるが、「学校の魅力化」と言いながらも、一方で「確固とした地域連携の組織づくり」にも重点を置いたものとなっている。つまり、「学校と地域とが連携して、地域で育った子どもたちを、自立し、社会貢献できる若者に育てる」という共通認識を持った組織（コンソーシアム）の構築が強く求められている。そして、そのモデルを創るための研究がリージョナルモデルである。矢掛高校は歴史の流れの中で、新たな局面を迎えたのである。

令和時代の矢掛高校

一、リージョナルモデル研究協議会の発足

令和元年（二〇二〇）六月十九日、矢掛高校に於いて、山野通彦町長を会長に、小田春人県議会議員を顧問として、地域で活躍されておられる方々、有識者の方々を会員として、第一回リージョナルモデル研究協議会が開催された。三年間の研究指定を活かして、地域との連携をより一層深化させ、矢掛高校が、地域になくはない存在、地

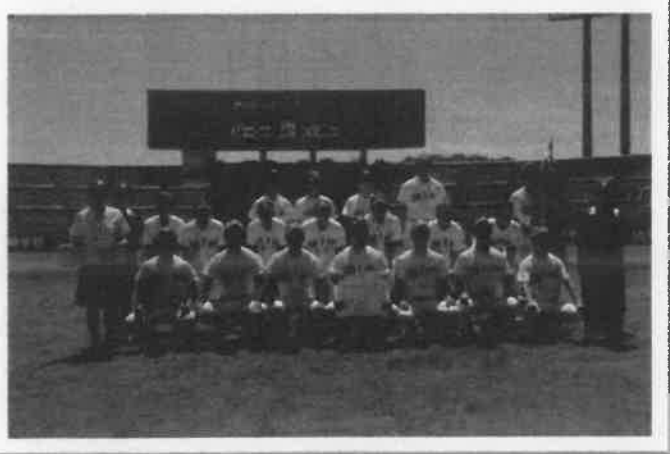


矢高祭

域活性化の一翼を担える存在へと更なる成長を遂げるべく、様々な角度からの協議がなされ、方策が検討された。協議会に集まっていたいただいた各委員の方々のあたたかい励ましの言葉や、するどい指摘に、改めて矢掛高校に対する地域の期待を実感した次第である。

二、軟式野球部の快進撃

令和元年（二〇二〇）八月五日、矢掛高校野球部が第六十四回全国高等学校軟式野球東中国大会で優勝し、見事全国大会への出場を決めた。全国大会への出場は五年ぶり二回目であった。全国大会出場までの過程を振り返ると、まず岡山県大会では初戦、真庭高校に七対〇、決勝では興譲館を一五対〇で破り、東中国大会へ出場した。同大会では一回戦、鳥取県代表の鳥取西高校を十一対〇、準決勝の玉島高校を六対〇で下し決勝に進んだ。決勝の相手は強豪倉敷工業高校であったが、劣勢が予想される中、二対一での逆転勝利をおさめ、見事全国大会への切符を手にした。八月二十四日から開催された全国高等学校軟式野球大会では、一回戦、北海道代表の北海道科学大高校に七対三で圧勝し、岡山県勢として、久しぶりの一回戦突破を果たした。準々決勝では四国代表の新田高校と対戦し、惜しくも二対三で敗れはしたが、見事、全国大会ベスト8に輝き、九月下旬に茨木県で開催された国体にも出場を決めた。激しい戦いに勝利し、全国大会ベスト8に輝いた監督、生徒たちの、チーム一丸となつてのがんばりは最高に素晴らしく、誇らしくもあったが、同時に、生徒たちを日頃から支え、励ましてくださった保護者の方々、地域・同窓会の皆様への感謝の気持ちでいっ



軟式野球部

ばいの出来事であった。

三、 未来に向けて

令和二年八月四日、矢掛町役場大会議室に於いて、令和二年度第一回リージョナルモデル研究協議会が開催された。新型コロナウイルス感染症防止のため、開催が危ぶまれていた協議会であるが、関係者の方々の熱意により、無事開催の運びとなった待望の協議会では、昨年度の成果報告及び全町民対象のアンケート結果の分析、今後の地域と矢掛高校との連携、進むべき方向性と具体的な方策が話し合われ、三年間の研究指定を活かして、今まで以上に地域との連携を深化させ、矢掛高校が、地域に不可欠な存在、地域活性化の一翼を担える存在へと、更なる成長を遂げるべく、地域の方々、同窓会の方々と共に邁進して行くという熱意があふれた協議会となった。

令和三年十二月十七日に、やかげ文化センターに於いて矢掛高校創立百二十周年記念式典が挙行される。式典開催にあわせて、本記念誌は作成され、『矢中・矢女・矢高百二十年の歩み点描』と題して、今まで発刊されている七十周年記念誌『古希』、八十、九十、百周年記念誌及び百周年記念式典の際の、本校卒業生である故佃幸男先生による講演の内容をもとに、明治三十五年（一九〇二）の矢掛中学校創立から今日に至るまでの百二十年の歴史を振り返り、これからの矢掛高校の進むべき方向性について着してきた。通史作成の過程で、



卒業式

色々な発見と、様々な人の想いに触れることが出来たように思う。岡山県に於いて、岡山中学校、津山中学校、高梁中学校に次ぐ、第四中学校設置の運動が、人口密度の高かった、備中南部で展開され、倉敷・玉島・笠岡・井原などの有力候補地を退けて、条件的には一番不利であった矢掛の地に、なぜ矢掛中学校が設立されたのか、どのような方々が矢掛中学校設立に尽力されたのか、校章や校歌はどのように考案され、どのような人たちが矢掛中学校の発展に寄与したのか。同様に矢掛高等女学校の歴史はどのような人たちの想いに支えられ、育まれていったのか。すべての事柄が新鮮であり、この矢掛の地に於いて、多くの先人たちが出会い、協力して紡いで来られた矢掛高校の歴史が愛おしく感じられる。戦後、新制矢掛高校となった後も、この矢掛の地で、本校の歴史は刻まれ、今日に至っている。これまで多くの先人たちが生まれ、受け継いで来られた矢掛高校の歴史を、大切に紡いで行くことが、私たちの使命であると確信している。

これからも、矢掛高校が、地域に喜びを与え、その発展に貢献する存在として、しっかりとその役割を果たし、地域と共に歩んで行くことを願い、矢掛高校百二十年概観の結びとしたい。

(校長 高月 秀人)